

○東北大学 学 大築正明

東北大学 正 鈴木基行

東北大学 正 尾坂芳夫

1. まえがき

現行コンクリート標準示方書において、引張主鉄筋をコンクリート引張部に途中定着(cut off)させる場合の規定には、cut off部材の挙動の相違や、cut off位置による部材耐力の低下は考慮されておらず合理的なものとはいえない。これまで、著者らの研究により、単調漸増載荷を受けるcut off部材の基本的挙動は明らかにされてきたが、繰り返し荷重を受けるcut off部材の挙動は、未だ十分に明らかにされていない。このような観点から、本研究では単調漸増荷重あるいは繰り返し荷重を受けるcut off部材の力学的挙動、特に破壊形態と部材耐力の評価法を提案することを目的とする。

2. 破壊形態の分類

図-1のように、著者らの研究¹⁾²⁾によりcut off部材の挙動は、次の4つに分類されることが明らかになっている。

I型破壊:部材が降伏する前にせん断破壊する形態

II a型破壊:cut off断面で引張主鉄筋の降伏により部材降伏がもたらされ、ついでせん断破壊する形態。

II b型破壊:最大曲げモーメント断面の引張主鉄筋の降伏により部材降伏がもたらされ、ついでせん断破壊する形態

III型破壊:最大曲げモーメント断面の引張主鉄筋の降伏により部材降伏がもたらされ、コンクリートの圧壊で終局となる形態

3. 繰り返し荷重を受けるcut off部材の挙動

繰り返し荷重を受けた場合、I型破壊のせん断耐力は単調漸増載荷の場合に比べ低下するが、他の破壊形態の場合には低下が見られない。また、単調漸増載荷の際にも認められたcut off断面付近での引張主鉄筋のひずみの集中の領域は、より広くなっていることが確認された。(1, 2, 4, Eシリーズが繰り返し荷重)

4. cut off部材の破壊形態の予測方法、およびせん断耐力の評価法

cut off部材の破壊形態は、現行の曲げ耐力式、せん断耐力式、および著者らの提案したcut off部材のせん断耐力の算定式($S_{c,s}$)を用いて予測することが可能である。

弾性計算上、最大曲げモーメント断面とcut off断面とが同時に降伏する場合には、cut off断面が先に降伏する。この事を踏まえ、計算上の曲げ耐力とせん断耐力を比較検討することにより、かなりの精度で破壊形態の予測ができる。

(1) スターラップがない場合

図-2にフローチャートを示す。

(2) スターラップがある場合

スターラップがない場合の破壊形態を検討し、図-2のようにスターラップ量に応じて破壊形態が移る。

予想破壊形態と実験で確認された破壊形態の比較を供試体諸元と共に表-1に示す。

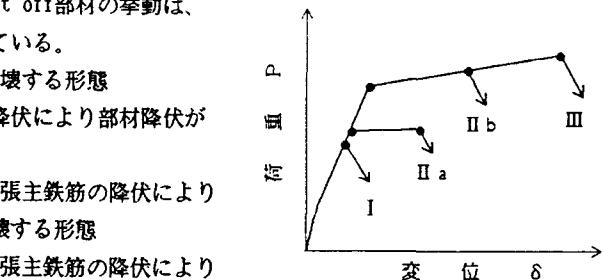


図-1 部材挙動の分類

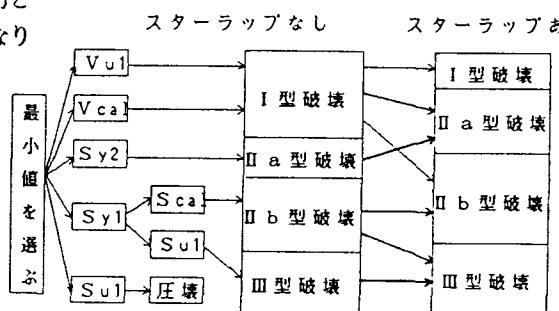


図-2 破壊形態の予測方法

